ようこそ目黒区へ

「紫式部さん。大丈夫ですか？」
心配そうに声をかける広報課Aさん
「うーん、元の時代に戻るのは仕方ないと
諦めもついたのだけど、こっちの時代で
手に入れた、このスマホだけは手放すのが惜しくて、
ずっと心が晴れないのよ。こんな便利で面白いもの、
元の時代でも使えたらって思うけど、
平安時代には電気も電波もないし、何より自分一人が
持っていてもつまらないのよね」
「確かに、紫式部さんのインスタが
更新されなくなるのかと思うと寂しいですね」
「そうだ！わたしのスマホ、Aさんが
貰ってくれない？それなら諦めもつきそう」
「わかりました！もしかしたら、
また来られるかも知れないですし、
それまでお預かりしておきます！」
「そうね。また会う日まで預けとく！」
愛用のスマホを渡し、手を取り合って別れを惜しむ二人。

～中略～

「さて、無事に全員揃ったところで、
あらためて帰還の儀を執り行おう」
そう言うとヤマトタケルは恭しく祝詞を奏上し始めた。
すると偉人たちそれぞれの頭の上に光り輝く輪が出現し、
それは少しずつ全身を覆うように足元まで降りてゆく。
「おっと、A殿。戻ってくるなりで悪いが、
もうお別れのようじゃ」
覚悟を決めた義経は兜の緒を締め直した。
慌てて広報課Aさんが声をかける。
「皆さん、目黒区に来てくれて、気に入ってくれて
ありがとうございました！もっとたくさん
お話聞きたかったです。もしまた会えたら……」
全て言い終わる前に、笑顔で手を振る偉人たちは
瞬く間に光の中へ姿を消してしまった。
「なんだかあっけないお別れでしたね」
手元に残った紫式部のスマホをそっと
抱きしめ広報課Aさんがつぶやいた。
「元の時代へ戻った稀人たちには
現代の記憶は残らない。長い夢から覚めたように
何事もなく元の生活に戻るであろう」
少し気まずそうにヤマトタケルが声をかけた。
「そっか、覚えていたら歴史が変わるかもですしね。
その代わり私が覚えています。
偉人さんたちと過ごした日々のこと全部」
「そうだな。それがよい」
微笑む広報課Aさんの決意をヤマトタケルも称賛した。

総合庁舎前に静寂が訪れ、すべてが
万事解決かに見えたその時だった。
先ほど偉人たちを送り返した際と同じ
まばゆい光が辺りを照らし、
その光の中から着物姿の人影が現れた。
「え？これってまたヤマトタケルさんの仕業ですか？」
「い、いや、我は何もしておらぬが。
もしや大量に時空を開いた揺り戻しが来たのかも
しれん！」珍しく慌てるヤマトタケル。
光の中から現れた人物は辺りを不思議そうに見回し
「ここはどこじゃ？どうなっちゅうがじゃ」
時空を超えてやってきた偉人の扱いは慣れたもの、
混乱する侍風の男性へすかさず声をかける広報課Aさん。

11 住み続けられるまちづくりを

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

ストーリー全文は目黒区公式ウェブサイトでご覧いただけます ▶ ようこそ目黒区へ

目黒区 Meguro City

さくら咲き 心地よいまち ずっと めぐろ